

滋賀短期大学令和3年度入学式式辞

今年は桜の咲くのが早く、校門の桜も今週の初めに満開になっていましたが、皆さんが来るのを待っていたように咲き続けてくれていました。今日、入学式を待っていたように美しい花吹雪になっています。

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。ようこそ滋賀短期大学へ！大学の教職員在校生を代表して心から歓迎します。

保護者やご家族のみなさんも、おめでとうございます。残念ながら会場には入っていただけず、映像でご覧いただくこととなりますがお許しください。

そして本日、みなさんのために、ご多忙の中をご臨席いただいているご来賓の方々にも心から御礼を申し上げます。日頃から厚いご支援をいただいております。本当にありがとうございます。

昨年から、新型コロナウイルスの感染防止のため、皆さんも行動を大幅に制限され、十分に楽しい高校生活がおくれなかったかもしれません。感染はまだ続いており、今後、いつ終息したといえる状態になるのかわかりません。しかし感染に対する対策は十分に取りがながらも、滋賀短期大学では授業はできるだけこのキャンパスで行いたいと思っています。昨年はオンラインを使った遠隔授業も行いましたし、最新のデジタル技術を使う教育も進めなければならないのはいうまでもありません。そのために今年の新入生の皆さんには、一人一人がノートパソコンを持ってもらうことにしました。大学での授業でも家庭での学習にもこれを活用して、これからのデジタル社会に慣れてほしいと思っています。それでもやはりこのキャンパスで友達と先生と豊かな交流の機会をもちながら勉学を進めてほしいと思っています。

さて今年の入学生の中には、17人の留学生がいますがそのうち16人がベトナムから、1人がスリランカからです。2回生にもベトナムとスリランカの留学生が6人います。このように海外からの留学生といっしょに学園生活を送ることは、日本人の皆さんにとってもよい経験になると思います。同じクラスの人に限らず、どんどん話しかけて交流してほしいと思います。

先日、ある新聞で高校2年生の女の子が書いた国際協力に関するエッセイ*を読みました。その人は、小さい時から町のボランティアを熱心にしてきたようですが、このコロナ禍の中でボランティア活動もできなくなっていたようです。そこで彼女が考えたのは、オンラインで行えるボランティアはないかということで、捜してみたところベトナムの人に日本語を教えるオンラインのボランティア活動が見つかったそうです。

そうした時、気づいたのが、自分の住んでいる地域のごみ置き場に分別しないままのゴミ袋がたくさん放置されていることでした。これは回収の時に違反ゴミだということでそのままになっており、時間がたつとともにひどい状態になって

いました。そのゴミは誰が出しているのかと問題になり、どうも近所に住むベトナムの人の家から出ているらしいということが分かったそうです。

そこで彼女が考えたのは、ベトナムの人はもしかしたら日本語がわからないため、ゴミの分別方法もわからないのではないかという点でした。住んでいる市に聞いても、英語や中国語のマニュアルはあるのに、ベトナム語のものはないということがわかりました。そこで彼女は、ベトナム語の翻訳ソフトを使ったり、他の市のベトナム語のマニュアルを探したりして、ベトナム語でゴミの出し方についてのマニュアルを作り、ベトナムの人の家庭に配ったそうです。そうすると次の週からは、違反ゴミが出なくなりました。

まとめとして彼女は次のように書いています。「私たちが困っていたのと同じくらい、ベトナムの皆さんもきっと困っていたのだと気が付いた。私たちは日本人ばかりの中で暮らしているせいで、日本語をあまり理解できない人がいるかもしれないことに意識を向けることを知らないまま生きてきた。なぜこれが分からないのかと相手の非を責めようとしていた自分がとても恥ずかしくなった。」

このことがあってから、彼女は日本語を教えるボランティアの時間がくると、一層責任感をもってとりくむようになったそうです。

もう一つ、エピソードを紹介します。

今年には東日本大震災からちょうど10年になります。10年たったからといって何かが大きく変わったわけではないといわれる時もあります。しかしその中で、震災前と大きく変わったことが知られているところがあります。宮城県の北部に気仙沼という港町があります。震災では大変大きな被害を受け、市内の家の1/3が被害を受け、1043人が亡くなり、今も214人が行方不明のままです。

その気仙沼の岩手県との境に近いところに唐桑（からくわ）という町があります。ここも当時2400戸の家のうち1/4が被災し、100人以上の人が亡くなったり行方不明になったりしています。その唐桑を10年後の今、取材した記事があります**。

一見、何も変わっていないように見えても、土地の人に言わせると人の心がか変わったというのです。民宿の女将さんはこう言います。「震災前の唐桑は閉鎖的だったし、保守的だった。外から人が来ると、あれ誰だっぺ？と。それが今は、じいさんたちが外国から来る旅行者に「グッドモーニング!」とか言っててね」と。

いわば鎖国状態だった唐桑を開国したのは、全国からやって来たボランティアたちだったのです。この民宿の女将さんは、もともとカキの養殖をしていて、それが津波でほぼ全滅したそうです。しかしボランティアにやって来た大学生が、その壊れた家を直して活動の拠点にし、地域の復興を進めていく中で、一緒に働いた女将さんはその若者たちからもらうエネルギーによって新しく生きてゆく力が生まれたと言います。

復興ボランティアに来ていた学生の中には、東京から気仙沼に移り住んで、ここで生活する人も出てきました。そのような若者を見て、地元の子供たちのなか

にも、早くこの土地から離れて都会へ行きたいと思っていたのが、唐桑が好きになってくるものが出てきたといいます。震災で大きな被害を受けたことは動かしやうがないけれど、そのあとの変化はこの土地をまさに開国に導いているのです。この開国に導いたのは、「よそ者と若者とばか者」というのが、東京から移住してきた人のことばです。

以上紹介した2つのエピソードに共通するのは、若い人の何かに取り組もうとするあつい心と、それを実現するための積極的な行動力です。最初の女子高校生は地域のために役に立ちたいという漠然とした思いが、ベトナムの人のためにベトナム語を勉強してゴミ出しの資料を作るという形をとって成果を上げました。気仙沼の唐桑でボランティアをしていた東京の学生は、何とかこの地域をもう一度人が住めるようにしたいという思いから、自分たちがそこに移り住んで生活をするという形で唐桑の人たちの心を変えました。

みなさんもこれから社会や地域とかかわりながら何かやってみたいという心をもっているのではないのでしょうか。だからたとえば子供が好きだから保育士になりたい、食べ物や健康に興味があるから栄養士になりたい、病院で医療秘書がやりたい、それぞれの思いをもってこの滋賀短期大学にやって来たと思います。

我々の純美禮学園は建学の精神を心技一如といいます。何か難しい言葉だと思うかもしれませんが、心で思っているだけではなく、それを実現するためには技（わざ）が必要でそれと一体にならなければいけないということですが、技というのは単に技術とか専門性というだけではなく、それを形にする行動力でもあります。

この2年間で皆さんが今もっているあつい心を形にできるように勉強してください。若い時にこそそれが存分にできるからです。

令和3年4月2日

純美禮学園理事長・滋賀短期大学学長 秋山 元秀

*明治学園高等学校2年目淑乃「私と世界の接点」(産経新聞 2021.3.30)

**小暮聡子「「海と生きる」日本が震災から得た未来」(ニューズウィーク日本版 2021.3.16)